

News Letter

演劇の総合的研究と演劇学の確立

The 21st Century Centre of Excellence Programme, Waseda University
Development of Research and Study Methodologies in Theatre

報告 国際研究集会「演劇資料と演劇研究－テキストと画像－」	1
特集記事	
研究上演 ボール・クロード原作 舞踊詩劇「女と影」	2
◆芸術文化環境研究コース/多和田葉子講演会	3
◆アーカイブ構築研究(映像)コース/演劇理論研究(貴路)コース	4
◆アーカイブ構築研究(演劇)コース/	
古典演劇研究コース	5
◆演劇理論研究(西洋/比較)コース/演劇理論研究(東洋)コース	6
◆報告「2005年度博士論文成果報告会」/	
イベントカレンダー	7
◆新刊紹介/編集後記	8

報告 国際研究集会「演劇資料と演劇研究－テキストと画像－」



12月10日合同シンポジウムの模様

事業推進担当者 和田修・平林宣和

本研究集会は、アジア演劇における資料のあり方とそれを用いた研究方法について、日本の歌舞伎、および中国大陸、台湾の演劇を主たる対象として論ずることを目的として開催された。

歌舞伎研究においては、役者絵の持つ研究資料としての意味を中心に討論することとした。あわせて演劇博物館で開催した企画展示「日英交流 大坂歌舞伎展－上方役者絵と都市文化－」(会期：2005年12月1日(木)～2006年1月20日(金))と関連させ、上方役者絵研究の世界的権威であるアンドリュース・ガーストル氏、浮世絵研究に独自の美学的視座を導入するタイモン・スクリーチ氏(ともにロンドン大学SOAS教授)を招聘し、国内の役者絵研究の最前線で活躍する赤間亮(立命館大学教授)・岩田秀行(跡見女子学園大学教授)・神楽岡幼子(愛媛大学助教授)の各氏と活発な議論を展開させた。

また、研究報告として、演劇研究センター特別研究生の理忠美沙氏による演劇博物館所蔵の役者絵および同検索システムをフル活用した斬新な作品研究、倉橋正恵氏(日本学術振興会特別研究員・演博客員研究員)による演博所蔵未公開資料の紹介と幕末歌舞伎興行の実態の分析が行われ、近世演劇研究における資料の取り扱いについて議論が深まった。

●プログラム

2005年12月9日(金)13:30～17:30/国際会議場井深大記念ホール

【基調講演1】(日本演劇部門)＜研究資料としての役者絵＞

講演：タイモン・スクリーチ「江戸文化の中の役者絵」

講演：赤間亮「日本の演劇書と図像資料」

【基調講演2】(中国大陸および台湾演劇)＜中国大陸および台湾における演劇資料と演劇研究＞

講演：車文明「現存する中国演劇資料の特質およびその社会学的意義」

講演：邱坤良「解釈とパフォーマンス-台湾演劇史の資料、研究と上演」

12月10日(土)10:00～17:30/国際会議場井深大記念ホール

【研究報告】＜演劇資料研究の最先端＞

報告1:理忠美沙「役者絵にみる黙阿弥作品～安政四年「蔵計時占市」を例に」

報告2:倉橋正恵「幕末江戸歌舞伎の興行形態と劇場運営」

報告3:千田大介「中国皮影戯研究の現状・資料とアプローチ」

【討論1】＜日本演劇におけるテキストと画像＞

アンドリュース・ガーストル、岩田秀行、神楽岡幼子、司会：和田修

【討論2】＜中国大陸および台湾における演劇資料と研究＞

基調報告：吉川良和「非文字文化としての中国伝統演劇研究」

パネリスト：車文明、邱坤良、曹飛、千田大介、司会：平林宣和

【国際シンポジウム】日本演劇・中国大陸および台湾演劇合同の質疑応答

一方の中国大陸および台湾演劇研究に関しては、中国大陸で最も整備された演劇博物館を併設する山西師範大学戯曲文物研究所の所長車文明氏、および台湾の舞台芸術家養成の拠点である台北芸術大学学長で台湾演劇研究の第一人者である邱坤良氏のお二人に、初日の基調講演をお願いした。車氏は大陸における演劇資料の特徴を俯瞰的に述べられ、また邱氏は大陸とは異なる社会的、歴史的條件に規定された台湾の演劇資料について多面的に語られた。

また翌日の研究報告、およびシンポジウム基調報告については、それぞれ慶應義塾大学助教授の千田大介氏、一橋大学教授の吉川良和氏に報告を依頼し、日本人の研究者が中国あるいは台湾の演劇を研究する際に見えてくる演劇資料のあり方、およびそこに反映された演劇自体の特質について語っていただいた。

互いに近接した地域でありながら、日本と中国大陸および台湾の演劇研究者の間には、それぞれが如何なる資料を有し、またどのように研究が行われているのか、十分な認識があるとはいえない。今回のシンポジウムは、そうした懸隔を埋めるための初歩的な試みとして、一定の意義があったといえるだろう。

研究上演 ポール・クロードル原作 舞踊詩劇「女と影」

2005年11月28日(月)18:30開演

早稲田大学大隈講堂

古典演劇コースでは、文献研究で積み重ねてきた研究成果をもとに、古典演劇・古典芸能の伝承者と協力して、歴史上の名作の復活、失われてしまった古典技法の復元、稀曲の上演などを試みてきた。このたびの研究上演プログラムは、在日フランス大使であり詩人・劇作家、日本の伝統文化のよき理解者でもあったポール・クロードル歿後50年を記念して、大正12年(1923)3月東京帝国劇場の第二回羽衣会で初演された『女と影』の復活上演を試みたものである。羽衣会の主催者で『女と影』を初演した五世中村福助氏の御長男七世中村芝翫氏を監修者、御令孫九世中村福助氏をCOE客員講師として迎え、2004年8月に研究プログラムはスタートした。

クロードルは、薄桃色の霧の中に潜む日本の美しさを発見している。その美しさを舞台上に再現することが、研究上演の目標である。しかし、クロードルの原作には、せりふも歌詞もなかった。第二稿には、「桃の小枝」の歌が増補されている。この歌は、五世福助氏の父五世中村歌右衛門氏の懇望により書き加えられたものと推定されるものである。「桃の小枝」の歌を核にして、歌詞とせりふを創り出す作業からはじめた。クロードル歿後五十年記念企画委員会事務局長でクロードル研究者の中條忍氏の御指導をいただき、『女と影』のモチーフとなった月と影、光と闇などを題材にしたクロードルの詩や戯曲を集め、必要に応じ翻訳もしていただいた。若手のクロードル研究者杉山明美氏の協力のもと、フランス語の辞書を片手にクロードルの原詩を読み耽り、少しでもクロードルに近づこうとする福助氏の真摯な姿が、われわれに大きな感動と勇気を与えてくれた。試行錯誤の結果、COE客員講師鈴木英一氏による第一稿が書きあがったのが、2005年6月。10ヶ月にわたり集中的に取り組んだ共同研究の成果であった。

COE客員講師として全編の作曲を担当した常磐津文字兵衛氏は、男と女の世界を伝統的な常磐津節の節付けで行なう一方、月と影の織り成す場面を五線譜に拠る現代邦楽の作曲で表現した。その結果、初演の長唄にはなかった骨太なドラマが生まれた。常磐津の付けぜりふにより、せりふも含め全編が壮大な音楽劇となった。常磐津の生演奏に対して、現代邦楽は録音にした。音響を担当した文学部講師八幡泰彦氏、吉越誠一氏の協力により、生演奏と電子音が響きあい、この作品を「舞踊詩劇」と名付けたクロードルの構想が再現されることになった。研究資料として配布したパンフレットには、鈴木英一氏補綴の台本、文字兵衛氏作曲の譜面に加え、COE客員講師金井勇一郎氏の舞台模型図、COE客員講師桜井久美氏の衣裳デザイン図が載せられている。

出演者は、歌舞伎から中村福助氏と女形の中村芝のぶ氏、舞踊家の藤間勘十郎氏と舞踏家の和栗由紀夫氏が参加した。振付は常磐津の生演奏を勘十郎氏、録音の電子音は和栗氏が振付をした。作調の田中伝左衛門氏の鼓と和栗氏の蝶が対決し、高山晴彦氏デザインの照明と戯れる幻想的なシーンが印象的であった。一回きりの上演なので、千数百席に対して数倍の応募があった。制作全般を担ったのは、第二文学部の劇場ゼミの学生である。満員の観客を大きな混乱もなく誘導しえたことも、大きな研究の成果であった。

(事業推進担当者 古井戸秀夫)



「女と影」より中村福助氏
撮影・三浦憲治



撮影・三浦憲治



撮影・三浦憲治

芸術文化環境研究コース 活動報告

国際研究集会「地域と劇場」

2006年1月21日(土) 13:00～18:00 小野記念講堂

本コースでは、これまでも各地の公共劇場関係者などを講師に公開研究会を行ってきたが、今回は研究者および劇場運営関係者の計7人をパネリストとしてお招きし、国際研究集会として議論の場を設けた。

指定管理者制度の導入は結果として、多くの公立文化施設で使命や運営方法を問う直す契機となり、劇場やホールにおいても地域との関係や事業内容、組織や専門性など様々な点からの検証が行われている。こうした状況において改めて「地域」と「劇場」の関係について考え、今後の研究の方向について展望する場として企画した。

第一部でははじめに、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジの演劇学科長であり、また同カレッジの大学院芸術経営・文化政策プログラムの責任者であるジェラルド・リッドストーン氏に講演をお願いした。文化政策の展開と劇場運営に関する評価の問題、そしてこの領域の調査研究と大学の役割、といった点についてイギリスの経験を事例としてお話いただいた。つづいて、日本における劇場研究の第一人者である清水裕之氏(名古屋大学教授)に、劇場・文化施設の展開と劇場研究の動向、そして今後の公共劇場・アートマネジメントのあり方について講演していただいた。

第二部・第三部はそれぞれ、「公立小劇場の役割と課題」「市民の支持と劇場運営」をテーマとしたパネル・ディスカッションである。第二部では吉祥寺シアターの箕島裕二氏、NPO法人STスポット横浜の理事長である曾田修司氏(跡見学園女子大学教授)の事例報告のあと、小劇場が持つ可能性、果たす役割、またその運営上の課題について議論した。第三部では、山口情報芸術センターの岸正人氏、まつもと市民芸術館の渡辺弘氏に、計画段階で市民による反対運動が生じた両施設の経緯と現状について報告いただき、地域を意識した劇場運営の課題などについて議論した。

最後に第四部として、パネリスト全員による総合討論を行った。民間と公共の役割分担や人材交流、大学といった地域の他機関との連携など、フロアも交え予定時間を超えての議論となった。

この日、都心では数年ぶりのまとまった雪となったが、地域交流の場としても考えられている早稲田大学の小劇場・小野記念講堂で、多くの参加者を迎えられ、充実した研究集会となったといえよう。

(客員講師 宮崎刀史紀)



ジェラルド・リッドストーン教授

多和田葉子講演会「わたしと演劇」

2005年11月7日(月) 15:00～17:00 小野記念講堂

芥川賞作家多和田葉子氏は、1982年以降ハンブルクに住み、ドイツ語でも作品を発表している。その作品はドイツ語圏でも高い評価を得ており、数々の賞を獲得している。2005年には、ドイツ文化を紹介した功績により、ゲーテ賞が授与された。近年は演劇にも積極的にに関わり、国際的な上演活動を展開する「劇団らせん館」に作品を書き下ろし、自身のパフォーマンス活動もさかんである。今回の講演では、演劇とのかかわりを含めながら、言葉に向ける作家の思いを語ってくれた。

多和田氏にあっては、違う言語に触れた時に覚える素朴な疑問や驚きが、創作の推進力になっているように見える。ドイツ語の世界に深く身を浸すことが、逆に日本語を新たな目で見つめ直すことになる。そこから、日本語の擬態語・擬声語の生き生きとした力や「身体性のある言語」の魅力が指摘される。とはいえ、芸術表現との対比で、アカデミックな言語の可能性が否定されるわけではない。言葉の持つ可能性すべてにすなおに向き合う。

多和田氏は「創作時には、小説を書いている、詩作をしている、戯曲を作っているといった意識はない」と言う。「言葉を書いている」というのが実感だそう。言葉の自然な動きにまかせることが、外からは「越境」と見えるようだ。「言葉はそれを生み出した者から家出をしたがっている」とは、多和田氏の表現である。氏は自作朗読会を数多く実施している。作品が声を通して伝わっていく朗読は、文学が演劇に向かう一つの道筋とも見える。

講演会があったのは早稲田祭明けの11月7日。キャンパスの人波は退いて、あふれるほどの聴衆というわけにはいかなかった。が、聴衆の講演に寄せる関心は一樣に高く、最後の質疑応答も活発だった。その折の多和田氏の誠実な受け答えが印象に残る。

(事業推進担当者 秋葉裕一)



アーカイブ構築研究(映像)コース 活 動 報 告

アーカイブ構築研究(映像)コースでは、演劇理論研究(舞踊)コースと共同で、「バレエと映画」の三回に亘る連続研究会を行なった。各回とも舞踊側から法政大学教授鈴木晶氏、映像側から小松弘が講師として参加し、19世紀末に動く映像の記録装置として発明された映画が、動く身体に対してどのようにアプローチしてきたかを、映画によるバレエの記録という観点から考えてみた。



第一回は11月5日に行なわれ、ガブリエレ・ダヌンツィオの劇詩を息子のガブリエリーノ・ダヌンツィオが監督したイタリアで作られた劇映画「船」(1920)を上映し、この中に登場するイダ・ルビンシュテインの踊りを取り上げた。ディアギレフのバレエ・リュスでも踊ったこの名高いダンサーが、映画の中でどのような演技を見せ、彼女のダンスが映画においていかなる機能を持って捉えられているかが、研究のポイントになった。映画の側からは、マニエリスム期に入ったイタリアの史劇映画の典型的な形式が見られるという点が指摘され、また舞踊の側からは1920年という年代にルビンシュテインのような有名なダンサーが実際にどのように動いていたのかが良くわかるという指摘がなされた。

第二回目は11月19日に行なわれた。イタリアのバレエ史に燦然と輝く「エクセルシオール」の記録映像(1913)が上映された。鈴木氏によるこのバレエの歴史的な解説が行なわれ、小松によりこの映画が撮影された背景についての説明がなされた。バレエの全幕を記録した映画史上最初のこの映画は現在僅か15分ほどの断片しか残っていないが、現存場面はこのバレエのプロローグ部分をほぼ全て保存しており、20世紀はじめのバレエ・ダンサーたちのテクニック・レベルを知る上でも貴重な映像である。

第三回目は12月3日に行なわれた。「夢幻劇・バレエ・映画」という表題の下に、19世紀末から20世紀のごく初頭までの映画の草創期に映画がバレエやダンスを撮影することによっていかに新しいメディアとしての同一性を獲得しようとしていたかについて、小松の見解が述べられた。

三回の連続研究会では時代をさかのぼって、1920年代、1910年代、1900年代と映画とバレエの関係を見てきた。映画は動体を記録する装置として発明されたのだが、撮影対象に人間の身体を好んで選び取ることによって、映像それ自体を人間的なものにしてきた。それは絵画が対象としての人物を好んでいたのに似ている。その際にバレエやダンスは対象として人間を映すことが出来るだけでなく、動きの素材としても映画に格好の材料を与えてくれたわけであり、映画はすぐに踊る身体を捉えることに熱中した。それはごく自然なことであった。映画はやがて対象としての身体の運動の芸術性を、自らの固有の芸術性、すなわち映像の芸術性として同化していくのだが、第三回目にはその例として1920年代のダンスやバレエを素材としたアヴァンギャルド映画についても触れた。

映像チームと舞踊チームは引き続き共同研究をしていくことになっており、その成果は新年度に予定されている研究会で発表されるはずである。

(事業推進担当者 小松弘)

演劇理論研究(舞踊)コース 活 動 報 告

COE演劇研究センター舞踊コースでは「日本における伝統的身体」をテーマとして連続シンポジウムを開催している。その第二回が1月27日早稲田大学小野記念講堂で「能の身体」をテーマとし、観世流シテ方能楽師の馬野正基氏を講師に迎えて行われた。



客席の江島弘志氏をお迎えし、宝生流の型との比較

日本の伝統芸能では「腰を入ろ」とか「腰が入ってない」といった言葉がよく聞かれる。いや芸能だけでなく、武道でも腰は重要視されている。あるいは単に重い荷物をかつぐといった肉体作業でも「腰でかつげ」とか言われたりする。では一体「腰」とは何か。さまざまな芸道で言われる「腰下丹田」とどう関係しているのか。この問題を伝統舞踊を中心に探ろうというのがその趣旨である。第一回のテーマは「雅楽の身体」、第三回は「日本舞踊の身体」である。

馬野氏は舞踊の種類によって、また能の流派によって腰と構えについての考え方が異なること、それに応じて「腰を返す」「腰を落とす」などの言い方があることを実演を交えて報告された。その後活発な質疑応答と討議が行われ、「腰を返す」タイプの構えが身体に強い負荷を課すものであり、身体的自由を保証する武道などの「自然体」とは対極のものであることが確認された。これは日本の伝統的「腰の文化」が決して一様ではないことを示唆するものであり、今後の研究にとって貴重な一夜となった。

(客員教授 尼ヶ崎彬)

アーカイブ構築研究(演劇)コース

活 動 報 告

「近松没後義太夫節初演作品データベース」について

本データベースは、拙稿「近松没後義太夫節初演作品一覧[未定稿]」上下(『演劇研究センター紀要』Ⅲ、Ⅴに掲載)に基づき、浄瑠璃本(通し本、いわゆる丸本)の現存する作品について、初板初摺本に拠って「作品名」「年記」「作者」「板元」の各情報を提供する。

拙稿同様に、「備考」項には、改題作品や、「年記」「作者」に異同のある場合にそれらの情報を、「翻刻」項には、戦後に行なわれた翻刻書を記した。また包紙(袋)の残るものは、その振り仮名に拠って、作品のヨミを示した。

また本データベースでは、「角書」(題簽・内題にあるもの)の情報と、画像の有無を追加した。演劇博物館ではWebサイト上で、「演劇博物館デジタル・アーカイブ・コレクション—貴重書(義太夫丸本・古浄瑠璃)」を公開しており、その浄瑠璃本247作277点のデジタル画像とリンクさせたものである。

義太夫節の作者第一世代・近松門左衛門の署名作は、伝存諸本の調査・研究が徹底して行なわれたが、一方、現在の人形浄瑠璃文楽や歌舞伎で最もよく上演される、第二世代の並木宗輔(『一谷嫩軍記』の作者)、第三世代の近松半二(『妹背山婦女庭訓』の作者)については、伝本状況や、そもそもいずれを初板の初摺本とみるべきかという基礎的な事柄もあまりよく判らない環境にあった。将来においては、浄瑠璃本書目の作成がまたれるが、本データベースは当面のところ、その代用ツールとなるものと考えている。

浄瑠璃本は、「丁付」—板外(ノド。右頁見開き中央辺にある)や板心(丁の折り目)にある、いわゆる頁付け—に作品名の一部を記す(『菅原伝授手習鑑』は「菅原」「菅」「手習」「手」)ので、巻頭巻末を欠く本でも、これを手掛かりに書名を判定可能である。僅かに年月日や作者名が残る場合は、各項目でその文字を入力、検索されたい。画像があれば、原本との照合も可能である。新たな整理・公開の便としていただきたい。

※近松門左衛門の署名作品(その翻刻書情報)は、近松研究所ホームページ「近松部屋」、「近松浄瑠璃作品所収本」で検索可能(http://www.sonoda-u.ac.jp/chikamatsu/websearch/top_index.htm)

(客員講師 神津武男)

古典演劇研究コース

活 動 報 告

「芸の伝承—稽古—」

2006年2月14日(火) 17:30~19:30

早稲田大学学生会館 和室108

古典演劇研究(人形浄瑠璃文楽)コースでは、浄瑠璃の復元的研究を行うにあたり、「芸の伝承」という問題をひとつの研究テーマとしている。このテーマに関してはこれまでも数回、当代トップクラスの人形浄瑠璃文楽の技芸員に講演および実際の復曲作業を依頼してきたが、今回は、最も日常的に行われている師匠から弟子への「稽古」を取り上げ、これまでもとは趣を異にする講演会が企画された。

講師としてお招きしたのは、2005年3月にも、当研究コースが企画した「酒吞童子枕言葉」鬼ヶ城対面の段の復曲演奏をご担当下さった、豊竹英大夫師である。本講演会は、通常公開されることのない実際の「稽古」を行っていただき、最後にお話を伺うという形式を取った。

今回の稽古材料に選定されていたのは、「菅原伝授手習鑑」四段目・寺子屋の段である。四世竹本越路大夫、五世豊竹呂大夫、二世野澤喜左衛門などの教えを受けた英大夫師は、寺子屋の段について、これら先人の語り方やエピソードを交えつつ、具体的かつ綿密な稽古を行われた。参集した特別研究生にとって、「芸の伝承」というテーマの重要性を、机上のみならず肌で感じることであった有意義な二時間余となった。



豊竹英大夫氏との懇談

(演劇博物館助手／特別研究生 田草川みずき)

演劇理論研究(西洋／比較)コース

活 動 報 告

演劇理論研究(西洋／比較)コースでは学外から様々な研究者をお招きして数多くの講演会を企画しています。今回はそのうちから2005年度11月から2月までに行われた講演会について紹介します。

ミヒャエル・ヘルター集中講義『ベケットの劇場』

ドイツからミヒャエル・ヘルター氏をお招きし、2005年12月2日(金)、3日(土)、4日(日)と集中講義が行われた。ヘルター氏は1974年に芸術家会館ベタニエン、93年国際アーティスト・イン・レジデンスのネットワークResArtisを設立するなど、芸術家を支援する活動を行ってきたが、ドラマトゥルクとしての活動も有名である。今回は、ヘルター氏がベケットのもとでドラマトゥルクを努めた経験をもとに講演していただいた。ベケット自身の言葉を書きとめたノートを多く引用しながら、ベケットの作劇術のコアを抽出していくヘルター氏の語りは、史実的な話と作品分析を縦横に織り交ぜるダイナミックなものであった。二日目には堀真理子氏(青山学院大学教授)、三日目には鈴木理江子氏(女優)をそれぞれゲスト・スピーカーとしてお招きした。堀氏には戦後日本の小劇場におけるベケット受容について研究者の視点から分析していただき、鈴木氏にはベケットの芝居を演じた際の身体拘束の感覚について実践者ならではのお話をいただいた。両者の講演にヘルター氏は熱心なコメントをしたうえで、観客をも含めた活発な議論がなされた。ドイツ語、英語、日本語が飛び交う状況であったが、ヘルター氏夫人である河合純枝氏の適宜な通訳のために違和感は全く無かった。(客員研究助手 川島健)

■プロジェクト紹介

今年度、演劇理論研究(西洋／比較)コースは九つのテーマ別プロジェクト研究を抱えています。各プロジェクトが各自研究会・勉強会を催しています。

第三回 「シェイクスピアゼミ」

シェイクスピア研究は、近年その地形図が変わり、新しい批評が乱立している。そうした中で最先端の批評理論を確認し、さらに新たなシェイクスピア研究の可能性・方向性を切り開くことを目標に、2005年度から「シェイクスピアゼミ」を発足させた。このプロジェクトは、坪内博士によって培われてきた早稲田大学のシェイクスピアの伝統(翻訳と、上演を重視した精緻なテキスト解釈)を深め、発展させてゆくためにも重要な任にあると思われる。メンバーは20人ほどで、ほぼ毎月、第一線で活躍中の研究者を招聘して研究会が行われているが、毎回非常に刺激のある講義や研究発表により、特別研究生の意識・意欲は相当高まっているようである。現在は、来年度に論文集として成果を世に問うべく、メンバー一同切磋琢磨している。(事業推進担当者 冬木ひろみ)

演劇理論研究(東洋)コース

活 動 報 告

演劇理論研究(東洋)コースは、2005年11月19日(土)に第三回定例研究会を、2006年1月14日(土)に2005年度国内研究集会を開催した。

第三回定例研究会は文明戯研究会として開催され、「中国演劇と西洋近代の受容——文明戯を中心に」というテーマのもと、二本の研究発表が行われた。一本目は明治大学教授の神山彰氏による「日本の新派、新劇と春柳社」で、日本近代演劇研究の立場から、日本の新派劇と中国の新劇の嚆矢とされる春柳社との関係について、当時の日本演劇の状況に基づき発表された。続いて中央大学教授の飯塚容氏が、「映画化された文明戯演目」というタイトルで発表を行い、文明戯と映画との関連性、および双方に存在する同一演目『姉妹花』が実際には二種類あったのではないかとする考察を行った。

2005年度国内研究集会は第一部の定例研究会、第二部の文明戯研究会という二部構成で開催された。第一部では神戸大学大学院の田村容子氏が「港からきた“女優”——

民国初期の北京における坤劇について」という題目で、当時の資料を元に北京の劇壇における女優に対する見方の変遷を追う発表を行い、次に東京大学大学院の清水拓野氏が「演技習得のエスノグラフィーの試み：秦腔教育への人類学的アプローチ」というタイトルで、演技の習得に関する文化人類学の立場からの研究発表を行った。

また第二部の文明戯研究会では、摂南大学教授の瀬戸宏氏が「張軍『從戯曲改良到話劇形成：清末民初戲劇的形成磨合与美学変遷』を読む」として中国の南京大学に提出された張軍氏の博士論文に関する書評を行い、その後、「1907年前後の日本演劇界——春柳社の背景」というタイトルで大阪芸術大学教授の大笹吉雄氏による講演が行われた。

(特別研究生 鈴木直子)



秦腔《武松殺嫂》の稽古風景：潘金蓮を切ろうとする武松：芝居のクライマックス、2004年9月11日清水拓野撮影、陝西省戯曲研究院俳優養成所(西安市)

2005年度博士論文成果報告会

2006年2月23日(木) 17:00～19:00

早稲田大学国際会議場 第2会議室

今年度の博士論文成果報告会は、以下のようなプログラムで行われた。

- ①南 聲 稿 [古典演劇研究(歌舞伎・日本舞踊)コース 2002年度特別研究生]
2005年度早稲田大学文学研究科 芸術学(演劇映像)専攻 学位取得論文
「舞う神考—日韓民俗芸能比較研究—」
- ②金 京 欄 [古典演劇研究(人形浄瑠璃文楽)コース 特別研究生]
2005年度早稲田大学文学研究科 芸術学(演劇映像)専攻 学位取得論文
「日・韓語り物文芸における女性像と担い手たち」—「堤上」説話・「まつらさ
よ姫」から『沈清歌』まで—



南 聲 稿氏



金 京 欄氏

各発表に1時間を設け、発表・質疑を行った。いずれも今年度博士号を取得した論文の成果報告であり、それぞれの発表が高度に専門的であるため、議論がしづらいのではという懸念が当初はあったが、幅広い分野から視聴者が集まり、白熱した討議が繰り広げられ、終了予定時刻を大幅に超過するほどの盛会ぶりであった。(客員研究助手 江口文恵)

Event Calendar

◆演劇研究センター

日英近松劇上演プロジェクト

ハル大学シアターカンパニー 湯浅版「堀川波鼓」

開催日: 2006年4月4日(火) 19:00～

2006年4月5日(水) 14:00～ ※アフタートーク有

場所: 早稲田大学小野記念講堂

(入場無料・予約不要)

翻訳・戯曲・演出: 湯浅雅子

アフタートーク(5日のみ): 湯浅雅子、キャスト全員、
竹本幹夫(演劇博物館館長・司会)

◆テレビ放送

舞踊詩劇「女と影」(2005.11.28 大隈講堂)

歌舞伎チャンネル(SKYPerfecTV! 325ch)にて放送

2006年3月23日(木) 13:30～15:00

2006年3月31日(金) 23:15～24:45

◆演劇理論研究(西洋/比較)コース

国際サミュエル・ベケットシンポジウム 東京2006
"Borderless Beckett"

開催日: 2006年9月29日(金)～10月1日(日)

場所: 早稲田大学国際会議場



基調講演

スタンリー・ゴンタースキー(フロリダ州立大学)

メアリ・ブライデン(カーディフ大学)

ステイヴン・コナー(ロンドン大学)

エヴリン・グロスマン(パリ第7大学)

パネル・ディスカッション「ベケットとその世紀の芸術」

イノック・ブレイター(ミシガン大学、サミュエル・ベケット協会会長)

アンジェラ・ムアジャーニ(メリーランド大学、名誉教授)

リンダ・ベン・ツヴィ(テル・アヴィヴ大学)

世界各国から総勢70名の先鋭ベケット研究者が来日し、発表を行う一大国際研究集会です。

日程などに関しましては、詳細が決まり次第下記ホームページにて告知していきます。

<http://beckettjapan.org/borderless-j.htm>

*以上のイベントの開催場所に関しては、右記のホームページをご参照ください。<http://www.waseda.jp/jp/campus/index.html>

演劇研究センターメールニュース配信のお知らせ

演劇研究センター主催の公開研究会やシンポジウムなどの情報をメールニュースでお届けします。

(1) 配信は不定期です。

(2) 個人情報はメールニュースの発信および演劇研究センターからのお知らせ以外には使用いたしません。

(3) ご不要の場合にはいつでも配信を止めることができます。

(4) 携帯電話のメールアドレスには配信いたしません。

登録は右記のホームページからお願いします。<http://www.waseda.jp/prj-21coe-enpaku/index.html>



『明るい鏡—ルネ・クレールの逆説』

(武田潔著 早稲田大学出版部 2006年3月発行)

2006年3月はルネ・クレールの没後25年にあたるが、このたび、本COEプログラムの成果の一環として、早稲田大学の助成を得て、『明るい鏡—ルネ・クレールの逆説』を上梓した。クレールはかつて「最もフランス的な映画作家」と称されて世界的な人気を誇った監督であるが、第二次大戦後は保守的な映画の代表とみなされて厳しい批判にも晒された。本書はフランスの映画批評におけるクレールの評価の変遷を、その全キャリアにわたって再検証した“メタ批評”の書物である。

(事業推進担当者 武田潔)



『現代演劇と文化の混淆：オーストラリア先住民演劇と日本の翻訳劇との出会い』

(佐和田敬司著 早稲田大学出版部 2006年3月発行)

ポストコロニアル・モーメントと言うべき今日、演劇が翻訳を介して文化を越え、ハイブリッドな状況を作り出すことを、我々はどのように受け止めるべきなのか。舞台翻訳の実践に関わってきた著者が、日本の翻訳劇の誕生と変容の歴史と、オーストラリア先住民演劇を含むいくつかの戯曲翻訳上演の事例をふまえて、演劇における文化の混淆の可能性と問題点について、探求を行う。

(事業推進担当者 澤田敬司)

編集後記

早稲田大学演劇博物館21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」のニューズレターも本号で第3号となる。年度末の繁忙な時期にもかかわらず、予定通り上梓できたのは紙面作成に関わっていただいた方々のお蔭である。この場を借りて御礼を申し上げたい。

本誌は本拠点の広報活動を主たる目的として本年度より創刊されたわけであるが、編集会議を重ねるたび感じるのは、本拠点の研究活動の密度の濃さと幅広さである。連日のように各コースやセンター全体で催し物や研究会が行われており、拠点内部にいてもそのすべてに参加・把握することが困難な現状で、よって催し物すべてを本誌で取り上げることが到底不可能である。紙幅にも限界があり、また日程と本誌の締切が合わなかったために残念ながら記事として取り上げることができなかったものも少なくない。しかしそのような状況下でも中身の濃い、充実した内容のものをお届けできたのではないかと自負している。

来年度は本プログラムも5年目、最終年度となる。7ページのイベントカレンダーで予告した「国際サミュエル・ベケットシンポジウム」をはじめとして、今まで以上に多彩かつ大規模な催し物や成果報告が予定されている。今後もその広報の一端を担うことができれば幸いである。

News Letter 第3号

2006年3月20日

編集：江口文恵 川島京子 川島健 木村理子 志村三代子 宮崎刀史紀

発行者：早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館・演劇研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL：03-5286-1829

URL：http://www.waseda.jp/prj-21coc-enpaku/